



室田志保 経歴

- 1975 鹿児島県生まれ
- 1995 薩摩焼窯元『橋本陶正山』絵付け部入社
- 2004 鹿児島県青年会議所の海外留学派遣事業留学生に選ばれ、『薩摩焼をインテリアに取り込む』のテーマでイタリアフィレンツェに短期留学
- 2005 金沢国内留学 九谷焼人間国宝工房にて技術指導を受ける
- 2005 薩摩焼窯元『橋本陶正山』絵付け部退社 (10年勤務)
- 2005 制作用アトリエを、鹿児島県大隅半島大野原に構える
- 2007 初個展 (ギャラリービーズ)
- 2010 日本ボタン大賞展 審査員特別賞 優秀賞 受賞

御挨拶

私が、東京のボタン博物館で薩摩ボタンに魅せられて、早いもので12年の歳月が経ちました。ボタンに出会うまでの10年間、お茶道具の絵付けをしていた私に、江戸末期の薩摩ボタンはその小さな面に宇宙の広がりを感じさせてくれました。それから、とりつかれたように「自分の手で、現代の薩摩ボタンを描きたい」と強く思うようになり、試行錯誤しながら、日本の南薩摩の地で細々とボタンを描いている日々です。花鳥風月や浮世絵の花魁姿など、日本独特の生活文化が描かれた当時の薩摩ボタン。そのレプリカを描くのではなく、今の時代を生きる私がデザインする薩摩ボタンを見ていただけたら幸いです。

是非この機会にご高覧頂きたく、またご意見いただけると嬉しいです。

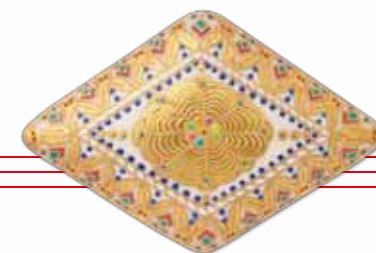
薩摩志史 絵付け師 室田志保

薩摩志史 絵付け師 室田志保
891-2104 鹿児島県垂水市田神 3718 番
HP : <http://satsuma.cc/index.html>
E-mail : info@satsuma.cc



薩摩志史
satsuma.cc

室田志保





薩摩ボタン紋様・デザインの説明

紋様



櫻朧紋(ようらくもん)

仏像の装飾や建築物の破風などに用いられた紋様を薩摩ボタンの円周に沿ってデザインしたものの。



兎繫紋(うさぎつなぎもん)

うさぎ上部を円周に沿わせて配置し、前にしか進まない縁起の良い動物紋様として描かれている。



青海波紋(せいがいはもん)

青海波という雅楽の舞曲から名づけられたとされており、水を意味する紋様の一種。



七宝紋(しっぽうもん)

仏教の經典で七種の宝物を意味し、とてもおめでたい柄として薩摩の紋様ではよく描かれている。

デザイン



青い鳥(あおいとり)

漢字の「青」を上下にわけ、上部は木の枝にみたてて盛り金で鳥を描きました。下部はチルチルとミチルは、夢の中で幸せの青い鳥を探したという童話をもとに月をデザインし、フランス語で「幸せの青い鳥」とかいたもの。



宝(たから)

漢字の「宝」を上下に分け、上部は星の天祥をイメージし、王様の玉という意味で、クラウンを描いています。

薩摩ボタンの出来るまで

1 ボタン生地

薩摩焼には、黒薩摩・白薩摩とあり、ボタンは白薩摩の白い生地を使用



2 下描き

デザインを決めて、極細水性ペンで下描き(ペン跡は窯内で蒸発します)



3 すじ描き

極細イタチ毛を使いマット金(金または白金と、油を混ぜた液)で輪郭取り



4 色入れ

陶磁器用の絵の具をすり鉢で磨き込み、マット金の輪郭内に色を入れる



5 焼成

小ぶりの電気窯で750度4時間強かけて焼成し、自然冷却するまで待つ



6 修正

再び陶磁器用絵の具で色むら修正し、再度5の工程と同じく焼成冷却



7 金彩色

マット金で、細かい金彩色や盛金を施し、620度で3時間強低温焼成



8 完成

金を磨き、完成。



薩摩ボタンのトリビア

薩摩錦手と呼ばれる、薩摩ボタンの絵付け方法は、18世紀当時150年の伝統を誇っていた京都清水の色絵技法を、勉強しに行った陶工たちから始まり開花させたものです。同じ薩摩ボタンでも地方により絵付け方法が違い、薩摩で焼かれる薩摩ボタンの特徴は先に金細を入れることが特徴です。

金細で輪郭をとり、その中に絵の具を入れ込む、これを絵付けの技法では、「色入れ、色込め」ともいいます。

他の地方では、色が先に焼かれ、その上に金細が施されます。後者は使用劣化にともない金細が剥げやすいのが特徴です。

薩摩焼の特徴として、紋様の細やかさもあげられると思います。

もともと、茶道具の紋様専門の絵付け師だった室田志保は、小さいボタンの面に描かれる様々な文様もびたりと円周内に収めることができるのも特徴です。

これらの伝統を受け継ぎ、また次の時代へ繋げていく、それが伝統工芸継承者の役割でもあると思います。

